

【論 説】

## 螻蛄の斧

—— 古代ギリシア都市国家の民主化とペルシア戦争（下） ——

的 射 場 敬 一

### 目 次

はじめに

1. アテナイの発展と民主化
  1. 1. 重装歩兵と密集方陣の戦いの登場
  1. 2. ソロンの改革
  1. 3. ペイシストラトスの僭主政
2. イオニアとオリエント世界
  2. 1. イオニア植民都市ミレトスとミレトス学派（以上、前々号）
  2. 2. イオニア植民都市とリュディア王国
  2. 3. ペルシアの勃興とイオニア諸国
3. アテナイ・デモクラシーの成立とペルシア戦争
  3. 1. クレイステネスの改革
  3. 2. イオニアの反乱（以上、前号）
4. 第一次ペルシア戦争（以下、本号）
  4. 1. ペルシア帝国の反攻
  4. 2. ケルソネソスとミルティアデス
  4. 3. マラトンの戦い

結びに代えて

#### 4. 第一次ペルシア戦争

##### 4. 1. ペルシア帝国の反攻

ペルシア帝国は、イオニアの反乱を鎮圧した翌年の前493年、ヘレスポントス海峡から黒海に至る地域の征服に乗り出す。小アジアの沿岸部は、内陸部

## 蠅螂の斧（的射場）

からの攻撃ですでにペルシアの支配下にあった。ヘレスポントスとは、現在のダーダネルス海峡のことである。つまり、エーゲ海から黒海に至る、入り口の海峡である。フェニキア軍を中心とする「ペルシア海軍はイオニアを離れ、こんどはヘレスポントスの向かって左側に当たる（西海岸）地域をことごとく占領した<sup>(1)</sup>」のである。ケルソネソスのギリシア人の植民都市をことごとく、ペルシアの支配下においたのである。

前492年に入ると、ペルシアはギリシアへの侵攻を本格化する。「春になって他の諸将は大王によって司令官の職を解かれた」が、「ひとりゴブリュアスの子マルドニオスは海陸の大軍を率いて沿海地方に下った<sup>(2)</sup>」のである。

彼はまだ年も若く、ダレイオスの娘アルトゾストラを妻に娶ったばかりであった。マルドニオスはこれらの軍勢を率いてキリキアに着くと、自身は乗船して艦隊とともに発進し、陸上部隊は他の指揮官がこれを率いてヘレスポントスに向かった<sup>(3)</sup>。（ヘロドトス『歴史』巻6の43）

マルドニオスは、ダレイオス大王の娘婿であり結婚したばかりであった。ダレイオス大王からも期待されていたのであろう、反乱の鎮圧としてではなく、ギリシア本土への侵攻を期待されての遠征であった。それは、イオニアの反乱を踏まえての出撃であったことを象徴するのが、ヘロドトスが「世にも不思議なこととしか思えぬようなことが起こった」と述べているのだが、「マルドニオスは、イオニアの独裁者をことごとく排除して、各都市に民主制を敷かせた<sup>(4)</sup>」ことである。ペルシア帝国は、イオニアのギリシア人都市を自己の支配下において以来、自分たちの代理としての僭主を据えることで間接統治していた。イオニアの反乱は、その僭主の追放から始まった。僭主政に代わる民主政の樹立を望む民衆のエネルギーが燎原の火のように広まり、イオニアから遠く離れたキプロスのようなところまにまで反乱が拡大したのである。このような事情を受けてのペルシア本国の判断であろう、イオニアの反乱の鎮圧で一旦は復帰した僭主を追放し、民主政を樹立させたのである。

さて、マルドニオスは、「海陸の大軍の終結を終ると、ペルシア軍は海路ヘレスポントスを渡り、ヨーロッパに入って進撃したが、目指すところはエレクトリアとアテナイであった<sup>(5)</sup>」。ヘロドトスは、続けて次のように述べている。「もっともこの二都市は、ペルシア側にとっては単にギリシア遠征の口実に過ぎず、彼らはできる限り多くのギリシア都市を征服する心組であった<sup>(6)</sup>」ので、陸上部隊によってマケドニアを攻略した。この時点で、マケドニアより手前のペルシア寄りの民族は、「ことごとく隷従していた」。

しかしながら、マルドニオスのギリシア遠征は、不調に終わる。マケドニアに陣を張っていた時に、「トラキアの部族であるブリュゴイ人の夜襲」を受け、ペルシア兵の多数が殺戮されたのである。アトス沖でも海軍が大きな被害を受けたので、「この遠征軍は悪戦苦闘の末アジアに撤収した<sup>(7)</sup>」。つまり、ペルシア本土に撤退したのである。これが、マラトンの戦いの前のペルシア帝国による、初のギリシア遠征であった。

このマルドニオスのギリシア遠征は、ヘレスポントス海峡からヨーロッパ側に入り、隷属しない都市を順に攻略していき、エレクトリアとアテナイを陥し、そして最後にギリシア全体をペルシアの支配下に置くというものであった。それは、イオニアの反乱鎮圧の余勢を駆った、ある意味お手軽な感じのギリシア遠征であった。この遠征の失敗を受けてダレイオスは、方針を転換する。攻め落とすのは、エレクトリアとアテナイと決めると同時に、本格的な遠征に切り替えたのである。これが、マラトンの戦いに象徴される第一次ペルシア戦争である。

出撃の1年前の前491年、ダレイオス大王は、「ペルシア王に土と水を献ぜよと要求する使者をギリシア各地に派遣<sup>(8)</sup>」した。「ダレイオスとしては、これを良い口実にして彼に土と水を献じようとせぬギリシアの町々を平定しようという腹<sup>(9)</sup>」であった。ギリシア本土においてもペルシア王の要求に応えるポリスがすくなくなかったが、エーゲ海の島嶼部では、「使者の訪れたことごとくの島がその要求をいれた<sup>(10)</sup>」のである。それだけでなく、「すでに王に朝貢している沿岸の町々へも使者を送り、軍船と馬匹輸送用の船舶の建造を命じた<sup>(11)</sup>」。つまり、小アジアのギリシアの植民都市に対して、軍勢力ではなく、

## 螳螂の斧（的射場）

軍船と輸送船の建造を命じたのである。

翌年の前 490 年、ダレイオス大王は、ギリシア遠征に失敗した娘婿のマルドニオスを司令官職から解任し、別の司令官 2 人を任命し、アテナイとエレクトリアを討伐することを命じたのである。

新たに任命されたのは、メディア出身のダティスと自分の従兄弟に当たるアルタブレネスの両名であった。ダレイオスはこの二人に、アテナイとエレクトリアを隷属せしめ、奴隷とした者たちを自分の面前に曳き立ててくるようにとの命令を下し出発せしめたのであった<sup>(12)</sup>。（ヘロドトス『歴史』巻 6 の 94）

遠征軍は、「十分に装備を整えた陸上部隊の大軍を率いて進発」し、キリキア（現在のトルコ南部、キプロスの対岸部）のアレイオン平野に到着して陣を張った。そこに、「かねて諸民族に供出を命じてあった海上部隊」が合流し、前年ダレイオスが自国の朝貢国に調達方を手配しておいた馬匹輸送船も到着した<sup>(13)</sup>。陸上部隊も艦船に乗せて、600 隻の三段櫂船でギリシアに向けて出発した。途中、エーゲ海のギリシア本土と小アジアの間に浮かぶナクソスを攻め、「捕らえただけのナクソス人を奴隷にし、聖域と市街に火を放って焼き<sup>(14)</sup>」払った。そこからエーゲ海を越えて最初の攻撃目標であるエレクトリアに渡る途中で「次々に島に接岸してそこから軍兵を徴用し、住民の子どもを人質<sup>(15)</sup>」にとったのである。

エレクトリア人はペルシア軍が自国に向かって大軍で押し寄せて来ているのを知ると、アテナイに救援を求めた。アテナイは、直接の支援は拒んだが、カルキスのヒッポボタイに入植している 4000 人を援軍として送ることを了承した。ところが、エレクトリアの国論は、街を見捨ててエウボイアの山地に籠ろうとする一派とペルシア方に擦り寄る一派とに二分されていた。「エレクトリアを牛耳っていたノトンの子アイスキネス」は、このような現状をアテナイに率直に告げ、「エレクトリアと破滅の運命を共にせぬために、母国に引き上げるように要請<sup>(16)</sup>」した。アテナイ人はその忠告に従った。

ペルシア軍の攻撃を受けたエレクトリア人は、「出撃はもとより迎撃する意図もなく、町を放棄せぬ説が大勢を制してからは、何とかして城壁を守ることに専念<sup>(17)</sup>」した。激しい攻撃を6日間は耐え、双方に多数の死者が出た。7日目になって、「町の有力者であったアルキマコスの子エウボルボスとキュネアスの子ピラグロスの二人がペルシア方に寝返り、開城した。「ペルシア軍は町に侵入し」、「聖所を掠奪した上火を放ち」、「ダレイオスの命じたとおり市民を奴隷にした」のである。

ペルシア軍はエレクトリアを陥した後数日の間を置いてだけで、アッティカ領を目指して艦隊を進めた。「大いに気負ってアテナイ人にもエレクトリア人同様の憂き目に遭わせんものと意気込んでいた」が、上陸したのは、アッティカ地方の北部のマラトンであった。そして、そこに誘導したのは、20年前にアテナイを追放された前僭主のヒッピアスである。「マラトンが騎兵の行動に最も好都合であり、かつエレクトリアにも至近の位置にある<sup>(18)</sup>」というのが、その理由であった。しかしながら、普通に考えれば、アテナイの中心部から30数キロも離れているマラトンの地ではなく、市部から数キロのピレウスに上陸するのが妥当である。にもかかわらずヒッピアスは、ペルシア軍をマラトンに誘導した。なぜか。

マラトンの地は、56年前の前546年、アテナイの僭主の座を追放された父とともに亡命生活11年目に亡命先のエレクトリアから帰国し上陸したところなのである。ペイストラトスは僭主の座から2度目の追放にあい、亡命地のエレクトリアで息子たちと今後どうするかを相談した。その時に、アテナイへの帰国と再び僭主になることを提案したのが、ヒッピアスなのである。

「独裁権を奪回せよというヒッピアスの意見が通ったので、彼らに何らかの恩義を感じている町々から、義捐金を募りはじめた<sup>(19)</sup>。」その金額は莫大なものになり、亡命から11年目に帰国の途についた。ペイストラトスは54歳、息子のヒッピアスは前560年生まれということだから14歳である。

マラトンとその周辺は、もともとペイストラトス一門の地盤のひとつであった。

## 螳螂の斧（的射場）

彼らがここに陣営を張っていると、アテナイの町から一味の者たちが馳せ参じてくるし、また地方の各区（デーモス）からも、自由よりも独裁政治を歓迎する連中が合流して、ここで一同勢揃いをした<sup>(20)</sup>。（ヘロドトス『歴史』巻1の60）

ここマラトンの地で体勢を整え、アテナイ軍を破ってペイストラトスは僭主の座に返り咲いた。そういう意味で、マラトンの地は、縁起の良い場所なのである。ヒippias自身も前510年に僭主の座から追放され、20年ぶりの帰国であった。この時ヒippiasは、すでに70歳であるが、ペルシアのダレイオス大王との約束で、アテナイを下した後は、僭主の座に返り咲くことになっていた。アテナイ内部には、依然として前僭主に好意的な勢力やペルシアに好意的な勢力がいたので、マラトンに上陸すると内応者が出現するだろうと期待していたのである。ペルシア軍の上陸地点のマラトンは、ヒippiasにとって夢よもう一度という地であった。

### 4. 2. ケルソネソスとミルティアデス

前節で、ペルシア帝国は、イオニアの反乱を鎮圧した後で、黒海周辺のヨーロッパ側を攻めて征服したことを紹介した。その時に、黒海からエーゲ海に出る時の狭い海峡、ヘレスポントス海峡（現在のダーダネルス海峡）のヨーロッパ側のギリシアの植民都市ケルソネソス僭主だった、キモンの子ミルティアデス（Miltiadés, 前550頃-489）が「ある限りの資産を5隻の三段櫓船に満載して、アテナイ目指して出帆<sup>(21)</sup>」し、命辛々何とか生き延びてアテナイに30数年ぶりに逃げ帰ってきている。前493年のことである。

ケルソナスの植民都市には、叔父のミルティアデス（キュペセロスの子ミルティアデス）が、前550年代頃から僭主として君臨していた。よって、その地は半世紀以上もアテナイの植民都市であった。もともとケルソネソスには、トラキア部族のドロニコイ人が住んでいた。そのケルソネソスの僭主にミルティアデスになった経緯を、ヘロドトスは、次のように紹介している。

ケルソネソスのドロニコイ人はアプシントス人との戦いで劣勢に立って

いた。そこで神託を受けるために、デルフォイまで出かけた。巫女の言葉は、デルフォイの聖域からの帰国の途中でドロニコイ人を客人として遇してくれる人を「国家再建の指導者<sup>(22)</sup>」にすべしというものであった。ドロニコイ人がアテナイに立ち寄った時に客人として遇してくれたのが、キュプセロスの子ミルティアデスだった。そこで彼に、ケルソネソスに来て国家指導者になってくれるように頼んだという次第である。

キュプセロスの子ミルティアデスは、「大いに勢力をふるっていた」有力貴族のフィライオス家の出身であった。「4頭立ての戦車を仕立てる財力のある資産家<sup>(23)</sup>」の家柄に属するだけでなく、彼自身が「オリンピックの4頭立て戦車競技で優勝した輝かしい経歴<sup>(24)</sup>」があった。しかし、アテナイではすでにペイストラトスがクーデタを起こして僭主となっていた。ミルティアデスは、有力な家系であるだけでなく、彼自身がオリンピックでの英雄だったこともあって、ペイストラトスから疎まれていた。そのようなこともあり、ミルティアデスは、「もともとペイストラトスの支配にあきたらず、国を離れたい希望であった」ので、ドロニコイ人の申し出を承諾した。

ミルティアデスの家系は、生粋のアテナイ人ではなく、祖先は、ヘロドトスによれば、アイアコスとアイギナに遡り、「アテナイの国籍に入ったのは比較的新しい家柄<sup>(25)</sup>」であった。「女系を通じて当時有力なポリスのひとつであったコリントスの僭主を曾祖父にもつ血筋<sup>(26)</sup>」の有力貴族でもあったので、ケルソネソスの地に赴き、その僭主になることにそれほどの抵抗はなかったのであろう。ミルティアデスは、移住を希望するアテナイ市民すべてを引き連れて、ドロニコイ人たちと一緒にケルソネソスの地に赴いた。

同行したアテナイ人は、武装自弁の市民戦士であるから、ミルティアデスにとっての暴力装置となる。それゆえ、キュプセロスの子ミルティアデスを「招致した、かのドロニコイの首領たちは、彼を独裁者に樹てた」。つまり、ミルティアデスをケルソネソスの僭主にしたのである。彼が最初に手掛けたのは、ドロニコイ人がアブシントス人の侵略に悩まされていたので、それを防ぐために「ケルソネソスの地峡に、カルディアの町からバクテュエにかけて城壁を

築」くことであった。「ケルソネソスの頸部に城壁を築き」、「アップシントス人の侵入を阻んだ<sup>(27)</sup>」後で、ランプサコス人と最初に戦いを交えたが、ランプサコス軍の待ち伏せに遭い、ミルティアデスを生け捕りにされてしまった。ミルティアデスは、「リュディア王クロイソスと懇意であったので<sup>(28)</sup>」、クロイソスはランプサコスへ使者をやって、ミルティアデスを赦免するように脅迫し釈放させたという。

なぜミルティアデスが、ランプサコス人に捕縛されたエピソードを紹介したのかというと、そもそもキュプセロスの子ミルティアデスがいつ頃、ケルソネソスに赴いたのかが、はっきりしないからである<sup>(29)</sup>。ペイストラトスの僭主制に心樂しまず、それでドロニコイ人の依頼を快諾したということから、ペイストラトスが政権を握った前561年以降であるということは推測できる。リュディア王クロイソスによってその命を救われているが、クロイソス王の統治期間は、前560年から前546年までの14年間の間であるから、当然のことながら、前546年以降ではないことになる。さらに、マラトンの戦いの英雄、キモンの子ミルティアデスが生まれたのは、前550年であると言われている。その名は「ケルソネソスの開拓者ミルティアデスの名をとってミルティアデス<sup>(30)</sup>」と命名したとヘロドトスは書いている。とすると、キュプセロスの子ミルティアデスがケルソネソスに赴いたのは、前560年から前550年の間ではないかということなる。

ケルソネソスの僭主、キュプセロスの子ミルティアデスには「後継ぎの実子がなかった」ので、異父兄弟キモンの長子ステサゴラスを養子として迎えた。キモンの長子は、キモンの祖父の名をとってステサゴラスといい、「ケルソネソスに在った母方の叔父ミルティアデスの許で養育されていた<sup>(31)</sup>」のである。キュプセロスの子ミルティアデスが亡くなると、「政権と財産は異父兄弟のキモンの子ステサゴラスにゆずった<sup>(32)</sup>」のである。ところが、その兄が、「市会堂にいたとき頭を斧で打たれ<sup>(33)</sup>」殺されたが、彼にもまた後継者がいなかった。

ペイストラトス家と有力貴族のフィライオス家との関係は、微妙なものであった。叔父ミルティアデスがケルソネソスに赴いたのは、ペイストラトス



が僭主になったことを心しまなかつたからである。それは、アテナイに残ったフィライオス家のキモンもそうであった。逆に、ペイシストラトス家にとっては目の上のタンコブだった。前427年に僭主ペイシストラトスが亡くなった後、ペイシストラトスの息子たちは、「暮夜市会堂のあたりに刺客を忍ばせておき」、ミルティアデスの父のキモンを「暗殺した<sup>(34)</sup>」のだ。

ここからがややこしいのであるが、自分たちが暗殺したキモンの息子に対しては、親切にしていた。「ペイシストラトス家の一族は、ミルティアデスの父キモンの横死については何喰わぬ顔をして、ミルティアデスがアテナイにいる時から彼を厚遇していた<sup>(35)</sup>」。僭主のヒッピアスは、キモンの息子ミルティアデスを前524/523年には筆頭アルコン（執政官）に任命<sup>(36)</sup>している。ケルソネソスの僭主であった兄のステサゴラスが敵方によって暗殺されると、僭主のヒッピアスは、ステサゴラスの弟のミルティアデスに「ケルソネソスの事態を收拾させるべく、三段権船でかの地に派遣した<sup>(37)</sup>」のである。アテナイの筆頭アルコンまで務めたキモンの子ミルティアデスを、わざわざアテナイから遠く離れたケルソネソスまで派遣し治めさせたのは、なぜか。そのことを理解するには、アテナイの食糧事情とその食糧を確保するための戦略的位置としてのケルソネソスについて押さえておく必要があるだろう。

トゥキュディデスによれば、「アッティカは、痩せ地であるために最古の時代から内乱がなく、同一の人びとが住み続けたのである<sup>(38)</sup>」。つまり、アテナイに同一民族が、ミケーネ時代から住み続けているのは、そもそもアテナイが不毛の地であり、襲撃するほどの魅力がなかったからであるという。痩せた乾燥した土壌でも育てることができたのは、ウィリアム・バーンスタインの『交易の世界史』によれば、大麦である。大麦の生産量は、アテナイ人の腹を満たすには十分だったのである。

食糧事情の変化が起きるのは、「ギリシア人の舌がだんだん肥えて」きたことによる。大麦と小麦の「味の違いが分かるようになると、小麦への需要が高まり始めた」のである。アッティカの痩せた土壌と乾燥した気候は、「発芽させるには水やりのタイミングが重要な小麦栽培にはむいていなかった<sup>(39)</sup>」の

で、当然のことながら、それは外国からの輸入に頼るしかなかった。ではいつごろからアテナイ人は、小麦の輸入をするようになったのだろうか。

アテナイの穀物事情と交易の実態を別の観点から明らかにしているのが、グレン・E・マーコウの『フェニキア人』である。グレン・E・マーコウによれば、フェニキア人のエーゲ海交易の最盛期は前8世紀から7世紀の初期であるが、この時代に東方からギリシア世界にたくさんの品物がいってきた。しかし、アテナイではわずかしか見つからない。エジプトの小間物などは、周囲の海岸都市では幾つでも見つかるのに、アテナイでは一つも出ていないようである。なぜか。その理由は、アテナイでは市場経済が、前7世紀まではほとんど発展せず、「外国との接触などほとんどないような、どちらかといえば弱小な都市<sup>(40)</sup>」であったからである。アテナイにおいてようやく市場経済が発展し、経済的成長を始めるのは、前7世紀の後半である。社会が豊かになるなかで、大麦と小麦の味の違いが分かるようになったアテナイ人は、小麦を輸入するようになった。それと引き換えに洗練された陶器や織物、オリーブオイルやワインなどを提供<sup>(41)</sup> 始めたのである。まさにこの時期は、ソロンの改革が行われる前夜であった。アテナイが、経済的に発展することで貧富の格差が大きくなり、没落した市民が債務奴隷になるなどの問題が発生し、「貴族と大衆は久しく抗争<sup>(42)</sup>」し、「抗争は激しく行われ、人々は互いに久しく反目を続けたので、彼らは合意の上で調停者として、またアルコンとしてソロンを選び〔594/3年〕、彼に国事を委ねた<sup>(43)</sup>」のである。ソロンの改革が、前594年、ペイシストラトスが僭主になったのは、前561年である。つまり、前6世紀になってアテナイの穀物事情が変わったのであり、穀物とりわけ小麦を輸入するために、アテナイでは、オリーブ油やワイン、そして、洗練された陶器や織物の輸出に励むようになるのである。

アテナイにとっての重要な穀物の供給地が、黒海沿岸であった。黒海沿岸は、広大で肥沃な平原が広がり、豊かな穀物（小麦）の産地である。古代では地中海方面の穀倉地帯として重要視された。ギリシア人は早くからビザンティオン（後のコンスタンティノープル、現在のイスタンブール）などの植民都市を

黒海沿岸に設けていった。穀物のための重要な交易路が、エーゲ海からヘレスポントス海峡を抜け、マルマラ海を経てボスポラス海峡を通り黒海へ至るルートであり、そこは、アテナイの生命線とも言えるものであった。ヘレスポントス海峡は、狭い海峡であるだけに攻撃を受けやすかった。その安全性を確保するためには、ヘレスポントス海峡のヨーロッパ側のケルソネソスを抑えておくことは必須であったのだ。前550年代に、キュブセロスの子ミルティアデスが、ケルソネソスにアテナイ人を引き連れて、植民都市を建設したことは、まさにアテナイの国策に適ったものであった。前535年には、アテナイの僭主ペイシストラトスが、黒海周辺の植民地化と海峡の要塞化という大事業に着手している。ペイシストラトスはまた、ヘレスポントス海峡への南西からの進入路を見渡す、テネドス島、イムブロス島、リムノス島を確保している<sup>(44)</sup>。

つまり、黒海ルートは、アテナイにとっての生命線であった。「アテナイの存亡そのものが地上でも有数のか細い供給ルートにかかっていた<sup>(45)</sup>」のである。だからこそ、ミルティアデスの兄が殺された後、アテナイの穀物輸送の死活を制する黒海からの海上路をアテナイの支配下に置くように、僭主ヒッピアスが、筆頭アルコンまで務めたミルティアデスをケルソネソス半島に派遣するのは、当然のことであったのだ。

アテナイの港町ピレウスを発着点に海上を行き来するには、サロニコス湾の出口を形成する島々のあいだを慎重に通り返なければならなかった。前506年、アテナイはエーゲ海西部に浮かぶエウボイア島の肥沃な西岸を、カルキスという都市国家から奪い取った。これによって、穀物の供給を増やしたばかりでなく、ピレウスとヘレスポントス海峡のあいだを邪魔されずに帆走できる「海上スーパーハイウェイ<sup>(46)</sup>」を完成させたのである。

#### 4. 3. マラトンの戦い

マラトンの戦いをギリシア方の勝利に導いた英雄は、ミルティアデスである。前節で紹介したように、彼はケルソネソスの僭主をしていたが、前493年に突如アテナイに帰国した。およそ30年ぶりのことである。ペルシア帝国の傘下

## 蠅螂の斧（的射場）

にあったフェニキア海軍が、ギリシア本土を攻めるための露払いとして小アジアのポリス、そして、ヘレスポントス海峡のヨーロッパ側のギリシア植民都市も征服・占領してきていた。ミルティアデス自身も身の危険を感じ、財産をまとめて命辛々何とか生き延びてアテナイに逃げ帰ってきた。僭主のヒッピアスの要請で出かけた時には20代の若者であったが、帰国したときには、すでに57歳になっていた。

帰国早々、ミルティアデスは、10人の将軍の一人に選ばれた。ヘロドトスは、ミルティアデスのアテナイへの帰還、そして、将軍に選ばれたことを次のように述べている。

このミルティアデスが当時ケルソネソスから帰還後アテナイ軍の指揮に当たっていたのであるが、この男は二度まで死を免れてきたのであった。一度はフェニキア軍が、彼を捕らえてペルシア王の許へ連行しようと思死になって、彼をインブロス島まで追跡した時で、もう一度はフェニキア軍の追跡を逃れて帰国し、もはや危険はないと思った矢先に、反対者のものたちが彼を迎えて裁判にかけ、ケルソネソスにおける専制の罪を弾劾した時である。しかしこの反対派の追求も無事に切り抜け、民会において選出されて、アテナイ軍の司令官に任命されたのである<sup>(47)</sup>。『歴史』巻6の104)

「将軍」(ストラテゴス)の職は、前508年のクレイステネスの改革で新たに設置された軍事職である。アリストテレスの『アテナイ人の国制』によれば、「将軍たちや騎兵長官たちやその他の軍事関係の役人たちの選挙が民会で民衆の決定する仕方で行われる<sup>(48)</sup>」のである。戦士組織も10部族制にのっとって再編成され、各部族の部隊長格として各部族から1名の将軍が任せられたが、前501年以降、民会で市民全員によって選ばれるようになり、その重みをました。前5世紀に入るとアルコンなどほとんどの役職が抽選によって選ばれるようになったが、この役は、挙手による選挙が適用され、そのうえ、在任期間に制限がなく重任が認められたため、最盛期のアテナイでは、アルコンに代わってもっとも重要な役となった<sup>(49)</sup>。

前590年、ペルシア軍のマラトンへの上陸が伝わると民会が開催された。ミルティアデスの建議にしたがい、マラトン平野での迎撃を決定<sup>(50)</sup>する。アテナイの最高決定機関は、民会である。民会で、戦争をするかどうかの最終決定がなされるのである。そこが、王政とは全然違うところである。ペルシア相手に戦うかどうか、そして、マラトンまで出かけて行って戦うかどうかの決定にミルティアデスが大きな役割を果たした。ペルシアと戦うべしという決定には、前節で考察した、アテナイの食糧確保の生命線であった黒海ルートが、ペルシアによって断たれていることも大きな説得材料になったのではないだろうか。

民会決議後すぐにアテナイはスパルタに使者を送り、援軍を依頼した。スパルタは、援軍を送ることは了承したが、スパルタではカルネイオス月（今日の8月後半から9月前半に当たる）の7日から15日に至る9日間は、例年アポロンを祭神とするカルネイア祭が営まれているため、「兵を動かすには月齢が満ちるまで待たねばならぬから、9日には出征ができない<sup>(51)</sup>」とアテナイからの使者に返答している。スパルタからの援軍は、結局、マラトンの戦いには間に合わなかった。

スパルタ軍の到着が遅れていたこともあって、将軍たちの軍会議では、「見解が二つに分かれ、一方はペルシア軍と戦うには自軍の兵力が少ないという理由で交戦することの不可を説き、ミルティアデスを含む他の一派は交戦すべきことを主張した。司令官たちの見解が二つに割れ、しかも好ましからぬ方の説が勝ちを制する気配となった<sup>(52)</sup>」。戦いを指導した司令官は、各部族1名ずつの10人の将軍と、アルコンの一員であるポレマルコス（軍事長官）とで構成されていたので、ミルティアデスは、このポレマルコスのカリマコスの説得することにした。

実はわれら十名の司令官の意見が二つに分かれ、一方は交戦を主張し他方はこれに反対している。しかしながらもしわれらが戦わぬならば、必ずやわが国に激しい内部分裂が起こってアテナイ国民の士気を動揺せしめ、その結果はペルシアに屈することになるに違いない<sup>(53)</sup>。（ヘロドトス『歴史』巻6の109）

## 螳螂の斧（的射場）

ミルティアデスは、軍事長官のカリマコスに戦えば、「わが祖国は独立を保つのみならず、ギリシア第一等の国となる<sup>(54)</sup>」と説得して味方につけ、軍議を制した。要するに、スパルタの援軍の到着を待たずに戦うことを決定したのである。戦いを引き延ばせば延ばすほどに、内部分裂はひどくなるとの見立てがミルティアデスにあったということである。

ペルシアとの戦いに勝利するまでのアテナイは、決して大国とは言えず、国内政治は、親ペルシア派と親スパルタ派との争い、それに反僭主政がからんでいるという状況であった。僭主政を倒し民主政の基礎を築いたクレイステネスは、スパルタ及びスパルタの援助のもとで力を奮っていた寡頭派との対抗上、ペルシアと親密にしていた。前508年のクレイステネスの改革の後も、僭主派の残党がなお健在であり、彼らは、今やクレイステネスが属した旧敵アルクメオン家と、反スパルタ親ペルシアという一点で手を結んでいたのである<sup>(55)</sup>。それは戦場での軍議にも反映しており、それだけにミルティアデスは、スパルタの援軍を待つという口実で戦いを先延ばしすれば、内部分裂でアテナイは自壊すると判断したのである。

馬拉トンの平野でペルシアの遠征軍とアテナイ・プラタイアの連合軍が対峙した。ペルシアの遠征軍は、軽装歩兵、弓兵、騎兵を展開し、中央部に主力を配して陣を張った。戦いに参加したのは、ペルシア軍25,000と推定されている。これに対して、アテナイは約9,000、プラタイアからの援軍約1,000の連合軍である。その差は2倍以上あった<sup>(56)</sup>。強制動員された臣民対自由な市民軍の対決だった。アテナイ・プラタイア連合軍の指揮官は、ミルティアデスであった「ミルティアデスに指揮当番が巡ってきた時<sup>(57)</sup>」とヘロドトスが述べているように、10人の将軍は、日替わりで全体の指揮権を持っていたようである。

ミルティアデスは、アテナイ・プラタイア連合軍の戦闘隊形の横の長さを、ペルシア軍と同じにし、兵士の少なさを密集方陣の厚みで工夫した。

この時、馬拉トンに布陣したアテナイ軍の陣形には次のような特異点があった。アテナイ軍は戦線の幅をペルシア軍を等しく張ったのであるが、その中央部は僅か

数列の厚みしかなかった。アテナイ軍の最大の弱点はここにあった。ただし両翼は十分な兵力を具えて強力であった<sup>(58)</sup>。(ヘロドトス『歴史』巻6の111)

中央部分を薄く、両翼を厚くという陣形こそが、ケルソネソスの僭主としてペルシア軍の戦いにも同行したミルティアデスが、ペルシア軍の戦い方を熟知した上でのものであった。というのは、ペルシア軍の戦い方は、騎兵によって敵の両翼を圧迫して中央の方に追いやり、そこに集まってきた敵を中央の強力な歩兵部隊によって撃破するというもの<sup>(59)</sup>であったからである。ミルティアデスによるアテナイ・プラタイア連合軍の陣形は、このようなペルシアの戦いの逆手をとったものであった。

その人員によって圧倒的に不利なアテナイ・プラタイア連合軍が、ペルシア相手に圧倒的な勝利を収めることができたのかについての考察は後ほど行うことにして、戦いの推移を簡単に見ておこう。

ヘロドトスによれば、「陣立てを終わり犠牲の卦も吉兆を示したので、アテナイ軍は進撃の合図とともに駆け足でペルシア軍に向かって突撃した」。両軍の間の距離は、8スタディオン（およそ1500m）であったという。「ペルシア軍はアテナイ軍が駆け足で迫ってくるのを見て迎え撃つ態勢を整えていたが、数も少なくそれに騎兵も弓兵もなしに駆け足で攻撃してくるのを眺めて、狂気の沙汰じゃ、全く自殺的な狂気の沙汰じゃと罵っ」ていた。しかし、「一団となってペルシア陣内に突入してからのアテナイ軍は、まことに語り伝えるに足る目覚ましい戦いぶりを示した」。「マラ톤の戦いは長時間にわたって続いた」。戦線の中央部では、「ペルシア軍は敵を撃破して内陸に追い進んだ」が、「両翼においてはアテナイ軍とプラタイア軍が勝利を収めた。<sup>(60)</sup>」まさにミルティアデスが予想した通りであった。

勝利を得たアテナイ、プラタイアの両軍は、潰走する敵部隊は逃げるにまかせ、両翼を合わせて中央を突破した敵軍を攻撃し、かくて勝利はアテナイ軍の制するところとなった<sup>(61)</sup>。(ヘロドトス『歴史』巻6の113)

## 螞螂の斧（的射場）

ペルシア軍は2倍以上の戦力をもっていたにもかかわらず、なぜこういう帰結になったのであろうか。ペルシア軍は、騎兵・弓兵・重装歩兵から構成されていた。ペルシアの重装歩兵の槍はギリシア兵の槍よりも短く使いやすいが、集団戦というよりは個人戦向きであった。そのことを明確に述べているのが、第二次ペルシア戦争の前のクセルクセス王と前スパルタの王デマラトスとの対話である。そこでクセルクセス王は、「わしの親衛隊のペルシア人の内には、一時に3人のギリシア人を相手にして喜んで戦うと申し立てる強者もいるのだぞ<sup>(62)</sup>」と述べている。ペルシア軍は、騎兵で相手の両翼を攻めて中央に寄せ、そこを弓兵によって相手方の損害を招き、士気を落としたところで中央から撃破するというものであったが、基本は個人の武勇に頼る個人戦であった。

これに対して、ギリシア兵は、ホプロンと呼ばれる直径約80～100cmで浅い鉢のような独特の盾を持っていた。彼らがホプリタイと呼ばれていたのも、この盾に由来している。ホプロンは、腕と手の二箇所を支えるダブル・グリップの盾で、中央部に取り付けられた、細長い革が金属の輪に左腕を肘まで通し、縁の部分についた紐あるいは革の握りをもつようになっている。つまり、盾を前腕でしっかりと固定することが可能<sup>(63)</sup>であった。盾は身体の左側に大きく出て、右側はかなり露出される。その露出された部分を自分の右側にいる人の盾に入れて守り、他方自分の盾で左側にいる人の身体をの右側を守る。こうしておのずから隊列が形成され、それが乱れない限り、兵士の身体はびっしりと並んだ盾に守られている<sup>(64)</sup>。つまり、重装歩兵は直径約1mの円形の木製大盾で身を守り、2～3mもある長く太い槍で攻撃するのだ。

重装歩兵の密集陣に個々ばらばらに突進していった場合、最前列の槍だけが戦いの相手ではない。それを払いのけて盾で身を守っている最前列の兵を倒そうと近づいていくと、左からのみではなく後列からも槍が繰り出されてくる。これを防ぐのは容易ではない。ペルシア兵の槍はギリシア兵の槍よりも短いので使いやすいが、こういう戦闘には不利である。幾重もの槍ぶすまを作っている密集陣を突破するのは至難の技であった<sup>(65)</sup>。

このギリシアの密集方陣の戦いとペルシアの個々の兵との戦いの様子を、



プラタイアの戦いについてヘロドトス書いている。

ペルシア兵は勇気も力も劣らなかったが、堅固な武装を欠いた上に戦法を知らず、戦いの巧みさでは到底相手の敵ではなかった。彼らは単身または十人乃至その前後の人数が一団となって飛び出してゆき、スパルタ軍中に突入しては討ち果たされたのである<sup>(66)</sup>。(ヘロドトス『歴史』巻9の62)

結局これは組織的に構成された力とばらばらな個人の力との戦いで、勝敗は自ずから明らかであった。数時間の戦闘でペルシア兵の戦死者は6400人であったが、アテナイ軍の戦死者はわずかに192名であり、プラタイア軍の戦死者はそれよりも少なかったという。戦死者率は30対1という、驚くべき結果だった。この数値は、隊列を組んで平坦な地形で戦う重装備の槍兵の破壊力のすさまじさを物語っている<sup>(67)</sup>。

ここで大きな問題となってくるのは、ヘロドトスが、両軍が対峙し、その距離が8スタディオン（およそ1500m）になった時に、「アテナイ軍は進撃の合図とともに駆け足でペルシア軍に向かって突撃した<sup>(68)</sup>」と書いていることである。重装歩兵というように、その装備は、30kgから40kgと言われている。その装備で1.5kmも走ったら、激突するまえに疲労困憊になっている可能性があるし、編隊も崩れて組織的に構成された力を発揮するところではないのかという疑問が生じる。そんな疑問に答えるような面白い記事が、長田龍太氏の『古代ギリシア 重装歩兵の戦術』にあったので、それを紹介したい。

重装歩兵の密集方阵の戦いが意味をもつのは、それが隊形を崩さず密集したまま整然と敵にあたる時である。コンピュータで兵士の動きをシミュレートした研究では、駆け足突撃によって、隊列は最大で35%の整然性を失うそうである。よって、この戦い方の威力はかなり失われることになる。さらに興味深いのは、1973年に10人の体育大学の学生を使って行われた実験の結果である。学生に6.8kgの装備と4kgの盾をもたせた状態で隊列を組ませ、1,600mの距離を走らせる実験が行われた。その結果は、誰一人として盾を胸の前に構えた

## 螞螂の斧（的射場）

状態で 78.5m 以上を走ることができなかったということである。274.3m 地点で隊列が崩壊し、最終的にゴールに到達したのは、長距離選手ただ一人だったそうである。翌年に同じ実験を繰り返したところ、230m 地点で隊列が崩壊し、完走者はいなかった<sup>(69)</sup> そうである。予想できた結果である。このことから考えると、当時のアテナイの重装歩兵がいくら丈夫であったとしても、実験に参加した体育大学の学生よりも、3 倍から 4 倍も重い装備をもって、1,500m も駆け足で突撃することは土台無理なような気がする。

ペルシア軍の戦術は、両軍の重装歩兵が衝突する前に、弓兵が多数の矢を射て敵兵に損害を与え、敵を意気阻喪させることである。安藤弘氏は、『古代ギリシャの市民戦士』の中で、実際の駆け足突撃は「敵の弓兵の射程距離（ほぼ 180 メートル）には行ってからはじめられた<sup>(70)</sup>」と推定されている。体育大学の学生の事例を紹介されている長田龍太氏は、「当時の突撃可能距離は、精々 50-100m 程度であった<sup>(71)</sup>」と推測されている。安藤氏が推定されている 180m でも、正直厳しいのではないかと思う。当時のギリシアの重装歩兵は、実地訓練を積み重ねていたので、長田龍太氏の推定のように、50m から 100m ぐらいならば、隊形を崩さずに突撃できたのではないかと思われる。弓矢攻撃の被害と駆け足での体力の消耗や隊形の乱れを天秤にかけて、敵弓兵の攻撃による味方の損害が大きくなるなら絶妙なタイミング<sup>(72)</sup>での、駆け足突撃ではないだろうか。

ミルティアデスの戦術は、この駆け足突撃だけでなく、ペルシア軍と陣形の長さを同じにしながら、中央部分を薄く、両翼を厚くという陣形をとったことである。つまり、弓兵の効力を弱めるために駆け足突撃を行い、ペルシア軍の戦いが中央を突破であることを想定し、だからこそ両翼を厚くしてそこでペルシア軍を撃破することができたのである。両翼のアテナイ・プラタイア連合軍は、逃げる敵を追撃することなく、中央深く入り込んだペルシア軍を両側から挟み撃ちしたのである。想定外の事態に慌てふためいたペルシア軍と、指揮官の号令下でまさに一糸乱れず戦ったアテナイ・プラタイア連合軍との差は歴然としており、それが、数時間の戦闘でペルシア兵の戦死者は 6,400 人、アテナイ

軍の戦死者はわずかに192名という圧倒的勝利になったのであろう。

日中の激戦で疲労していたアテナイ軍であったが、重装歩兵は隊列を組んで山間の難路に向かった。8時間の行軍だった<sup>(73)</sup>。ペルシア軍が、「残りの船の向きを変えて沖に逃れ」「スニオン岬を廻って船を進め<sup>(74)</sup>」、アテナイ市に向かっていたからである。

ペルシア軍がスニオン岬を廻っている一方、アテナイ軍は町を救うべく足の続く限りの速さで急行し、ペルシア軍の到着以前に帰国することができた。そしてマラトンでもヘラクレスの聖域に布陣したのであったが、この時もキュノサルゲスにあるヘラクレスの杜の境内に陣どった<sup>(75)</sup>。(ヘロドトス『歴史』巻6の116)

マラトンの地で戦った重装歩兵の不意のアテナイ帰還で、ペルシア軍はアテナイ市への攻撃を諦め、ペルシア艦隊は「アジアへ引き上げていった<sup>(76)</sup>」。都市国家アテナイは、巨大帝国ペルシア相手に圧倒的勝利を収めたのである。

## 結びに代えて

なぜアテナイは、単独でもペルシア帝国に立ち向かったのか、その企ては、蟻螂の斧ではなかったのかというのが、この論文の問題意識であった。ダレイオス大王が即位する以前に、ペルシアはオリエント世界を統一していたが、ダレイオスの時代にペルシア帝国は、東は現在のパキスタンのあたりまで西はギリシアのマケドニアにまでその版図を拡大していた。まさに超巨大国家であった。それに対して、アテナイは、ギリシアそのものが小さい上に、無数の都市国家に分かれている中の市民の数が数万しかない都市国家であった。ハンセンによれば、「ペルシア帝国の予備兵のマンパワーはギリシアの20倍から50倍はあり、支配下の領土は70倍に達していた」のであり、このような「巨大な帝国がとなりの小国を屈服させるのに失敗した例は、めったにない<sup>(77)</sup>」のである。マラトンの戦いの1年前、つまり、エレトリアとアテナイ膺懲のため

## 螞螂の斧（的射場）

のギリシア遠征を企図した、1年前の前491年、ダレイオス大王は、エーゲ海の島々だけでなく、ギリシア本土の国々に対しても「ペルシア王に土と水を献げよ<sup>(78)</sup>」と要求する使者を派遣した。ほとんどの国が、この要求に従い、ペルシアの宗主権下に入った。

ペルシア軍が、エレクトリアを陥し、マラトンに上陸した時、アテナイは民会を開催し、善後策を協議する。アテナイ市民の大多数がペルシアと戦うべしとしていた訳ではなかった。アテナイの国内政治の対立は、民主派と僭主派だけでなく、親ペルシア派と親スパルタ派の間でも生じていた。寡頭派を支援するスパルタへの反感ゆえに親ペルシア派の立場をとる、民主派の勢力も多数いたのである。当然のことながら、ペルシア軍のマラトン上陸という事態になってもペルシアに恭順の意を尽くせば、平和裡にペルシアの宗主権の下にはいることができると考えていた勢力もいた。ペルシアの圧倒的な兵力を相手に戦うのは、あまりに無謀であったからである。

前510年に僭主ヒッピアスを追放し、前508年のクレステネスの改革によって民主政の基礎を築いていたアテナイは、僭主による支配だけは避けたいと願っていた。僭主の登場を断固として拒否するという決意の現れが、その制度的工夫としての陶片追放である。それほど、僭主政の再現を嫌っていたし、恐れていた。マラトンに上陸したペルシア軍には、20年前に追放したヒッピアスがいた。ペルシア軍をマラトンの地に誘導してきたのもヒッピアスであり、彼は、ペルシア軍の支援で再び僭主に返り咲くことを狙っていたのである。ヒッピアスがペルシア軍にいることは、アテナイの反スパルタ勢力にとっては希望であったが、反ペルシア派にとっては悪夢でしかなかった。

ペルシアの脅威が迫るなか、ケルソネソスのギリシア人植民都市の僭主であったミルティアデスが30数年ぶりに帰国する。ミルティアデスは、60歳に手が届こうとしていた。民会は、ミルティアデスを将軍に選んだ。民会がマラトンの地で戦う決断をしたのも、戦場のマラトンで将軍たちが交戦派と非交戦派に分かれて内部分裂しそうになっていたのを食い止め、ペルシアとの交戦に導いたのも、ミルティアデスであった。そのミルティアデスを、30数年前に

ケルソネソスの地に送り出したのが、当時の僭主ヒッピアスである。両者は、マラトンの地で、再び相見えた。マラトンの戦いは、専制対自由の戦いであり、僭主政対民主政の戦いであった。両者は、それを体現して、向き合ったのである。

ヘロドトスは、アテナイがペルシア帝国と正面から向き合えるだけの国になったのは、少なくとも気持ちにおいては負けないだけの強国になったのは、ヒッピアスを追放し、クレステネスの改革で民主国家になったからであるという。ヘロドトスによれば、アテナイはペイシストラトス家の僭主政の下にあった時には、まだ弱小国であったが、前508年のクレステネスの改革で強国へと変貌していった。それが、マラトンの戦いで勝利につながったと考えている。

クレステネスの指導の下に民主化を果たしたアテナイの最初の試練は、寡頭政樹立を目論んだイサゴラスとスパルタ王率いる軍隊を、アテナイの民衆が撃退した直後に訪れた。アテナイのアクロポリスの丘から退去したスパルタ王クレオメネスは、アテナイ人が「自分にはなほなだしい侮辱を加えた信じ、ペロポネソス全土から軍勢を集めた」。ヘロドトスによれば、「彼の本心はアテナイ国民に報復し、イサゴラスを独裁者に立てようとする<sup>(79)</sup>」ことにあった。クレオメネスに率いられたペロポネソス軍は、アテナイに近い小都市エレウシスに侵入し、同時に、クレオメネスは、スパルタと同盟関係にあった、エウボイア島の都市ボイオティアとカルキスを使喚し、アッティカ地方を劫掠させた。前506年のことである。アテナイは、二面攻撃に晒されたのである。だがアテナイは、ボイオティアとカルキスは後回しにして、エレウシスにいるペロポネソス軍を攻撃し撃退させた後、ボイオティアとカルキスに対して報復してみた。その次第は以下のものであった。

かくてこの遠征は失敗し不面目な結果に終わったが、ここにおいてアテナイは報復を志し、まずカルキスに進攻しようとした。ところがボイオティア人がカルキスを支援すべく、エウリボス海峡へ進出してきた。アテナイ軍はこの援軍を見ると、カルキスより先にボイオティア軍を攻撃することに決した。アテナイ軍はボイオティア軍を襲撃して大勝を博し、その多数を殺し、700人を捕虜にした。同じ日にアテナイ軍は海峡を渡ってエウボイアに侵入、カルキスをも攻撃しこれを破り、「馬持ち」

## 螞螂の斧（的射場）

たちの領地を4千の開拓民に配分し、この地に定住させた後に引き上げた<sup>(80)</sup>。  
（ヘロドトス『歴史』巻5の77）

つまり、アテナイは、当時クレステネスの改革のまっただ中であつたにもかかわらず、軍事大国スパルタ率いるペロポネソス軍を敗走させたのみならず、カルキスとボイオティアに対しては逆に侵略したのである。この事態について、ヘロドトスは、「アテナイが独裁下にあつたときは、近隣のどの国をも戦力で凌ぐこと」ができなかつたのに、「独裁者から解放されるや、断然他を圧して最強国となつた」と述べ、その理由を以下のように分析する。

かくてアテナイは強大となつたのであるが、イセゴリア（自由平等）ということが、単に一つの点のみならずあらゆる点において、いかに重要なものであるか、ということを実証したのであつた。…これによって見るに圧政下にあつたときは、独裁者のために働くのだというので、故意に卑怯な振る舞いをしていたのであるが、自由になつてからは、各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃やしたことが明らかだからである<sup>(81)</sup>。（ヘロドトス『歴史』巻5の78）

ヘロドトスによれば、クレステネス改革の以前の、ペイストラトス家の僭主政の下にあつた時のアテナイは、「近隣のどの国をも戦力で凌ぐこと」ができないほどの弱小国であつた。しかし、「独裁者から解放されるや、断然他を圧して最強国となつた」、だからこそ、軍事大国スパルタの連合軍を独力で撃破することができたのである。その理由を、「各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃やした」ことに求めているが、それこそが、アテナイ軍の士気の高さを担保したものだ。スパルタ側が悟つたのは、「アッティカ民族は独裁体制下に縛られている限り無力であり唯々として随順するが、解放されると優にスパルタ民族に対抗しうる勢力に発展する可能性<sup>(82)</sup>」である。

なぜアテナイがペルシア相手にマラ톤の地で戦つたのかについて、もう一点だけ指摘しておきたい。ヘレスポントス海峡のケルソネソス植民都市は、アテナイの穀物供給にとっての生命線である黒海ルートを守つていた。この

前506年の戦いで、アテナイは、カルキスを破り、エーゲ海西部に浮かぶエウボイア島の肥沃な西岸を奪いとり、ピレウスとヘレスポントス海峡のあいだを邪魔されずに帆走できる「海上スーパーハイウェイ<sup>(83)</sup>」を完成させ、黒海からの穀物の供給を確実なものにしていた。ペルシアのアテナイへの攻撃は、このアテナイの穀物供給の生命線を奪うことから始まった。ミルティアデスのアテナイへの帰還は、その象徴でもあった。穀物供給の生命線が奪われたアテナイは、存立のためには、ペルシアと戦うしかなかった。ペルシアは、アテナイを追い込み過ぎたのである。ケルソネソスから逃げ帰ってきたミルティアデスの説得も功を奏したのか、アテナイ民会は、断固としてペルシアとマラトンの地で戦うという決断をするのである。まさに、「窮鼠猫を噛む」である。

マラトンでの戦いの勝利について、前節で考察したが、アテナイ・プラタイア連合軍は、数的には圧倒的に不利であった。それだけでなく、『戦闘技術の歴史1古代編』によれば、古典期ギリシアの軍隊は、「中東の帝国の軍隊に比べて規模が小さいだけでなく、技術でも遅れをとり、戦術も洗練されて<sup>(84)</sup>」はいなかった。にもかかわらず、圧倒的な兵力の差を押し返し、ペルシア軍の死者6400人に対して、アテナイ軍の戦死者192名という圧倒的な差で勝利した。それはまさに奇跡であるが、奇跡を演出したのは、60歳の将軍ミルティアデスである。

ミルティアデスは、マラトンの地で戦うという決断をした。会戦を行うことを決断したのである。会戦というのは、一定地域に双方の軍が大兵力を集結して行なう戦いである。騎馬兵・弓兵・歩兵の組み合わせで戦うペルシア軍にとっては、会戦が有利である。会戦は、数的有利を確実に活かせる戦いである。数的に圧倒的に不利な場合は、会戦のように正面からガチンコで向き合わないで奇襲や夜襲などのゲリラ的な戦いに活路を見出すのが普通である。にもかかわらず、ミルティアデスは、なぜ会戦を選んだのか。それは、会戦が敵の戦力を徹底的に撃滅する性格を持つ大規模かつ決定的な戦闘であり、短時間で決着がつくからである。動員できる戦力においても物量においてもペルシアは、アテナイ・プラタイア連合軍を圧倒していた。長期戦になればなるほど、ギリシア

本土のポリスも宗主権下におき十分な補給を確保できていたペルシアが、絶対的に有利である。運用可能な戦力がアマチュアの武装自弁の市民兵（農民）では、そもそも長期戦にはむかないのである。

アテナイ・プラタイア連合軍にとっては、活路は会戦しかなかったのである。しかし、会戦はそもそもペルシア方に有利である。アテナイが、絶対的に不利な状況の中で、勝利をもぎとるには、ペルシア軍の戦いを熟知して、その裏をかく戦術をとれるミルティアデスの指揮が絶対不可欠であった。彼は、ケルソネソスの僭主としてペルシア軍の戦いに兵を率いて参加しただけでなく、ギリシアの重装歩兵の密集方陣の戦い方をよく知っていたからである。アテナイ・プラタイアの重装歩兵は、ミルティアデスの指揮下、号令一下で一糸乱れぬ行動を取る巨大な塊となって戦った。駆け足突撃をし、両翼が敵陣を撃破した後は、方向転換して、ギリシア方に押し込んでいたペルシアの中央軍を挟み撃ち攻撃することで、ペルシア軍を文字通り撃破した。

田島正樹氏は、『古代ギリシアの精神』の中で、「集団戦であっても、それを戦う個人の側からの実感から描けば、やはり英雄個人の奮戦と感じられるものになる」と指摘されている。アマチュアの農民戦士個々人の奮戦を支えていたのは密集隊形の戦術であり、この隊形は、「戦友とごく近いところに身を寄せ合い見える形で戦うところから、自分の持ち場を放棄するような恥ずべきふるまいをできないようにお互い同士を監視し合い、また勇気づけ合うようになって<sup>(85)</sup>」た。お互いに戦友を見る存在であると同時に見られる存在である。それだけに、「勇気あるふるまいは、同僚兵士に勇気を奮い起こさせる。それによって踏みとどまることが可能になり、さらに他の同僚に勇気を与えるのだ<sup>(86)</sup>。」

マラトンでの戦いは、ミルティアデスの戦術の勝利である。その戦術が機能するには、重装歩兵の密集方陣が塊となって戦うことが可能でなければならなかった。「重装備を施した多数の戦士が一糸乱れぬ行動をとり、かつ、この隊形にふさわしい戦法を身につける<sup>(87)</sup>」には、数年にも及ぶ長期の実地訓練が必要であった。ペルシア軍との圧倒的な物量の差、戦力差を埋めたのは、「高い倫理観<sup>(88)</sup>」であった。大変な訓練に耐え、実戦で力を発揮するのに与って



力になったのが、「独裁者のために働く」のではなく、「各人がそれぞれ自分自身のために働く意欲を燃やしたこと」であった。自分自身のために働くということは、自らの存立基盤であるポリスのために働くということであった。ポリスに対する圧倒的な忠誠心を支えていたのは、まさに彼らがクレイステネスの改革で手に入れた自由と平等であったのである。

## 註

- (1) ヘロドトス『歴史 中』(松平千秋訳, 岩波文庫, 2007年改版), 巻6の33, 248頁。
- (2) 同上, 巻6の43, 255頁。
- (3) 同上, 巻6の43, 255頁。
- (4) 同上, 巻6の43, 255頁。
- (5) 同上, 巻6の43, 256頁。
- (6) 同上, 巻6の44, 256頁。
- (7) 同上, 巻6の45, 256頁。
- (8) 同上, 巻6の48, 258頁。
- (9) 同上, 巻6の94, 292頁。
- (10) 同上, 巻6の49, 258頁。
- (11) 同上, 巻6の48, 258頁。
- (12) 同上, 巻6の94, 292頁。
- (13) 同上, 巻6の95, 292頁。
- (14) 同上, 巻6の96, 293頁。
- (15) 同上, 巻6の99, 295頁。
- (16) 同上, 巻6の100, 296頁。
- (17) 同上, 巻6の101, 296頁。
- (18) 同上, 巻6の102, 297頁。
- (19) ヘロドトス『歴史 上』(松平千秋訳, 岩波文庫, 2007年改版), 巻1の61, 55頁。
- (20) 同上, 巻1の62, 56頁。
- (21) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の41, 253頁。
- (22) 同上, 巻6の34, 249頁。
- (23) 同上, 巻6の35, 250頁。

蠅螂の斧（的射場）

- (24) 橋場弦『民主主義の源流 古代アテネの実験』（講談社学術文庫, 2016年), 49頁。
- (25) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の35, 250頁。
- (26) 橋場弦『民主主義の源流 古代アテネの実験』, 前掲書, 49頁。
- (27) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の36, 250頁。
- (28) 同上, 巻6の37, 251頁。
- (29) 前野弘志（「ケルソネーソス, ナクソス, エウボイア植民—「エンクテーマタ型植民」の検討—」（『西洋史学報』20号, 広島大学, 1994年）の51頁）によれば, 前561年頃のことである。
- (30) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の103, 298頁。
- (31) 同上, 巻6の103, 298頁。
- (32) 同上, 巻6の38, 251頁。
- (33) 同上, 巻6の38, 252頁。
- (34) 同上, 巻6の103, 298頁参照。
- (35) 同上, 巻6の39, 252頁。
- (36) 橋場弦『民主主義の源流 古代アテネの実験』, 前掲書, 51頁参照。
- (37) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の39, 252頁。
- (38) トゥキュディデス『歴史 1』（藤縄謙三訳, 京都大学学術出版会, 2000年）, 第1巻2, 5頁。
- (39) ウィリアム・バーンスタイン『交易の世界史 上』（鬼澤忍訳, ちくま学芸文庫（筑摩書房）, 2019年）, 86頁参照。
- (40) グレン・E・マーコウ『フェニキア人』（片山陽子訳, 創元社, 2007年）, 232頁。
- (41) ウィリアム・バーンスタイン『交易の世界史 上』, 前掲書, 87頁参照。
- (42) アリストテレス『アテナイ人の国制』（村川堅太郎訳, 岩波文庫, 1980年）, 17頁。
- (43) 同上, 21頁。
- (44) ウィリアム・バーンスタイン『交易の世界史 上』, 前掲書, 88頁参照。
- (45) 同上, 88頁。
- (46) 同上, 89頁。
- (47) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の104, 298頁。
- (48) アリストテレス『アテナイ人の国制』, 前掲書, 77頁。
- (49) 伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』（東京大学出版会, 1982年）, 75頁参照。
- (50) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』（講談社学術文庫（講談社）, 2004年）, 203頁参照。
- (51) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 巻6の106, 298頁。

- (52) 同上, 卷6の109, 303頁。
- (53) 同上, 卷6の109, 303頁。
- (54) 同上, 卷6の109, 303頁。
- (55) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』, 前掲書, 201頁参照。
- (56) 同上, 203頁参照。
- (57) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 卷6の111, 305頁。
- (58) 同上, 卷6の111, 305頁。
- (59) 仲手川良雄『テミストクレス 古代ギリシア 天才政治家の発想と行動』(中央公論社, 2001年)28頁参照。
- (60) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 卷6の113, 306頁。
- (61) 同上, 卷6の113, 306頁。
- (62) 同上, 卷7の103, 77頁。
- (63) サイモン・アングリム, フィリス・G・ジュスティス, ロブ・S・ライス, スコット・M・ラッシュ, ジョン・セララテ『戦闘技術の歴史1古代編』(松原俊文監修, 天野淑子訳, 創元社, 2008年), 24頁。
- (64) 仲手川良雄『テミストクレス 古代ギリシア 天才政治家の発想と行動』, 前掲書, 25頁参照。
- (65) 同上, 30頁参照。
- (66) ヘロドトス『歴史 下』(松平千秋訳, 岩波文庫, 2007年改版), 322頁。
- (67) V.D.ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』(遠藤利国訳, 東洋書林, 2003年), 107頁。
- (68) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 卷6の112, 306頁。
- (69) 長田龍太『古代ギリシア 重装歩兵の戦術』(新紀元社, 2015年), 113頁参照。
- (70) 安藤弘『古代ギリシアの市民戦士』(三省堂, 1983年), 328頁。
- (71) 長田龍太『古代ギリシア 重装歩兵の戦術』, 前掲書, 113頁参照。
- (72) 橋場弦『民主主義の源流 古代アテネの実験』, 前掲書, 37頁参照。
- (73) V.D.ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』, 前掲書, 107頁。
- (74) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 卷6の115, 307頁。
- (75) 同上, 卷6の116, 307頁。
- (76) 同上, 卷6の116, 308頁。
- (77) V.D.ハンセン『図説 古代ギリシアの戦い』, 前掲書, 109頁。
- (78) ヘロドトス『歴史 中』, 前掲書, 卷6の48, 258頁。
- (79) 同上, 卷5の74, 163頁。

蠍の斧（的射場）

- (80) 同上，卷5の77，166頁。
- (81) 同上，卷5の78，165頁。
- (82) 同上，卷5の91，200頁。
- (83) ウィリアム・バーンスタイン『交易の世界史 上』，前掲書，89頁。
- (84) サイモン・アングリム，フィリス・G・ジェスティス，ロブ・S・ライス，スコット・M・ラッシュ，ジョン・セラータ『戦闘技術の歴史1古代編』，前掲書，22頁。
- (85) 田島正樹『古代ギリシアの精神』（講談社，2013年），28頁。
- (86) 同上，29頁。
- (87) 伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史 ポリスの興隆と衰退』。前掲書，138頁。
- (88) サイモン・アングリム，フィリス・G・ジェスティス，ロブ・S・ライス，スコット・M・ラッシュ，ジョン・セラータ『戦闘技術の歴史1古代編』，前掲書，22頁参照。